

東京都立千早高等学校のホームページをご覧くださいありがとうございます。

校長の五十嵐です。今年度もどうぞよろしく願い申し上げます。

4月7日（木）に平成29年度第1学期始業式を実施しました。

今回は始業式の校長講話をご紹介します。

今年もまた桜の季節がめぐってきました。自然は忘れることなく四季折々の恵を私たちに与えてくれます。私はこの季節になると、中国唐時代の詩人劉希夷の詩の一節「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」が頭に浮かびます。これは、人の世の変わりやすいのに比べ、自然は変わらないことのたとえです。

4月は出会いの季節とも言いますが、今日は、新たに千早高校にいらっしゃった教職員の皆さんとの出会いがありました。そして明日は、第14期生との出会いが待っています。

3月の修了式の際にも話しましたが、出会いと別れは人の世の常ですが、お別れした方々からいただいた教えを大切に、そして新たに出会った方々から教えをうけることにより、皆さんの成長の糧にして欲しいと思います。

平成29年度のスタートにあたり、2015年にノーベル賞、生理学・医学賞を受賞された大村智先生について紹介したいと思います。大村先生は1935年に山梨県で生まれました。スポーツ万能な少年でした。大学を卒業後、都立墨田工業高校定時制に5年間勤務しましたが、学業に熱心に励む高校生の姿に心打たれ、もう一度勉強しなおしたいと考え、昼は大学で学び夜は高校教師として働き、1963年に東京理科大学大学院を修了しました。その後、北里研究所に勤務し抗生物質の研究を進めました。45年余にわたり、微生物の生産する有用な天然有機化合物の探索研究を続け、これまでに類のない500種にも迫る新規化合物を発見しました。その方法は、いろいろな場所で採集した土から、薬のもととなる化学物質を生み出す微生物を探すのです。そのため、大村先生はいつもビニール袋とスプーンを持ち歩き、数えきれない場所から土を採取する作業を続けてきました。そして、1974年、静岡県伊東市にあるゴルフ場から採取した微生物から得られたのが、放線菌の一種が生み出すエバーメクチンです。エバーメクチンはアメリカの製薬会社によって改良され、イベルメクチンという薬が生まれました。この薬は寄生虫を除去する薬で、熱帯地方の風土病オンコセルカ症に極めて優れた効果を発揮しました。この病気はブヨによって媒介され、人に感染し目の中に侵入すると、失明につながるのです。また、リンパ節などに入り込むと足が腫れ上がり、歩くことができなくなる場合もあります。感染が広がった土地からは人々が去っていきました。この薬が開発された結果、中南米・アフリカにおいて毎年約2億人の人々に投与され、これら感染症の撲滅に貢献しています。さらにイベルメクチンは、世界中で年間3億人以上の人々が感染しながらそれまで治療薬のなかった疥癬症の治療薬としても威力を発揮しています。

大村先生は、フランスの生化学者パスツールの残した『Chance favours the prepared mind』という言葉を支えに研究を続けました。これは『幸運は準備された心を好む』ということですが、大村先生は『幸運は強い意思を好む』と自分なりに手直ししました。そして地道な研究に邁進したのです。

皆さんも、これからの高校生活やその後の人生で様々な困難に直面することがあるかと思いますが、その際にはこの言葉を思い出し、初心に立ち返り、意思をより強固なものとして、希望進路の実現に向けた歩みを続けて欲しいと思います。